研究

佐倍と国本由独歩

矢野竜渓

山本保

独歩の作品「歌かずるの記」及び「書簡」を左に紹介します。

明治二十八年八月二十八日（於東京）

父より書状あり、愈々退職の由申来り、来月の学費送り難き由、母非常の苦心の由申来る。われ自らの悲劇はそろそろ始まらんとする也。

（註）当時独歩は東京専門学校（現在の早稲田大学）を中途退学して自由党機関紙『自由』の社員となり月給三円をもらっていましたが、間もなく退社しました。一方弟收二は東京の学校に在学中でした。また父は山口県柳井町の裁判所に勤務していました。

友人田村三治宛ての手紙

本日国元（柳井市）よりの書状に昨来月の学費送り難き旨来り、悲しき秋と共に悲しき事の又僕の周辺に攻め寄せ候。

僕目下の処ただ途方に暮れるのみにて少々困り居り候。植村氏（註、植村正久、独歩が院礼をうけた東京麹町一番町教会牧師）とも徳富氏（註、民友社長徳富蘇峰）とも相談して、何とかして自活の道を求むるの覚悟に候。若し出来ぬならば其時は帰国でも致す外致し方無之候。

友人中桐確太郎宛ての手紙（九月四日付）

二日夜御認の御手紙は今朝拝読仕り候。原田氏の他行には相談出来ざりし事、只今になりては寧ろ小生に取りて幸なる事に立致り候。実は土曜日、徳富氏より来状あり、月曜日午後四時頃来社せよとか報知有之候に付き、民友社に参り候処、徳富氏の曰く、如分県へ佐倍に教師の口あり、月給四十五円也行かずやと。この事に付き、小生半ば承諾にて立ち帰り候。

実は此教師の口と申すは矢野文雄氏（竜渓）より申来りし者ゆえ、先づ矢野文雄氏より面談を経ざるべからざる次第に付き、徳富氏より十通の書状を得たれば両三日中に面談致す都合に候。

さ程に愈々教師となるや否やは矢野氏と面談の後にあらざれば未定に候。是に付き小生考ふるに、福島民報社の方は未定、而して教師の方も未定、民報社の方も多分好都合、教師の方も多分好都合、茲に於て小生何れを選ぶべきかに候。

若し小生が断言せる約束より言へば無論民報社の方に参るが当然に候へ共、小生目下の事情、なるべく俸給多分を望む特に候間、寧ろ教師の方に致し度きは小生の願ひに候。此の所は十分御推察被下候事を存候。就いては民報社未定を幸ひ、なほ四五日未定のまま御差し置き被下度候。

更に中桐確太郎宛て手紙（九月十七日付）

時に小生愈々如分の佐倍に参る事に決定致し候。遂に大兄（中桐確太郎）の芳志（福島民報社行き）を空しうしたる罪は最早別に申しわけ仕らず候。たゞ愛重にも大兄の御高許を乞ふの及に候

（註）田村三治、中桐雄太郎は東京専門学校時代の友人。就職先を決定した独歩の心境が、この書簡文の中ににじみ出ています。

「敷かざるの記」より

九月二十日

一時わが読書社会に喧伝せしめたる小説の著者（註）「経国美談」、矢野竜渓）を、其赤坂なる邸宅に訪ひし一人あり。明治二十六年九月二十日の夜の事なりき。此名高き小説の著者其人の事は、いまさら茲に説くの要なし。青年の名は佐藤武二（註）という。

著者は此時すでに四十余歳、長者の風を以て青年に対し、青年は未だ二十を幾何も超えず、後進の礼を持してこれに応へぬ。

此夜雨しめやかに降り屋外寂寥、談話は此長者が郷里豊後の佐伯の事に初まり、文学に及び政治に及び、長者が多事なりし過去の経歴など細かに語り、教育の事、地方少年の気風の事など、彼れより之れとはてしなかりき。

青年の情は火の如く燃へ、長者の心は家外の雨の如く静かに、遂に夜の十時に及びて青年は辞して帰りぬ。

（註）右の日記には矢野竜渓より送別の蜆餐（佐伯行）に招かれた時の模様が描かれています。

独歩は佐伯行きに当たって徳富蘇峰から「他人と衝突する勿れ、人を凌ぐ勿れ」という忠告をうけています。それに対して独歩は「されど徳富君心配し給ふなかれ。人と衝突せし吾は今の吾にあらず。人を凌ぎし吾は怒らく今の吾にあらざる也」と答えています。

蘇峰氏、「矢野竜渓さんが郷里佐伯の学校（鶴谷学館）に教師が欲しいが適当な人物はないかとの話で、私は取りあえず国木田君を推薦した」と云い、又、竜渓も「君が独歩氏を知った以上、徳富猪一郎（蘇峰）の紹介で、郷里佐伯の学校に薦めたのに始まった」といっています。

竜渓の邸から帰宅後、独歩は、「これ余が生涯の一新歩に非ざるか。言を換ゆれば余は更に新生涯の第一歩を始めつゝあるに非ざるか。然らば其覚悟なかるべからず。来るべき有数の事、数倍の精勤を以て辞記すべし。唯一の感歩は是なり」と日記に綴っています。

明治二十六年十月一日、赴任早々の独歩から中桐雄太郎へ出した手紙の一部。

自由の児は半ば束縛の絆（きずな）にかかり如。希望の児は半ば煩悶の蛇に呑まれ如。……

孤影蕭然（ショウゼン）京を発（たつ）し……

九月三十日の正午満腹の不平を殺して佐伯に入り如。

独歩の日記―明治二十七年二月十日

今朝、窓（下宿坂本邸）を排して下瞰（かん）すれば庭先きに一書状の落ちたるを発見す。披（ひら）き見れば何者とも知れず、吾（独歩）に向って一片の勧告書を送りたる也。其の文は左の如し。

別段書き置かざるべし。ただ其の意は、第一、先生（矢野）来佐の時、自分のため八分、学生のため二分を務むと言ひしは薄情ならずや。第二偏愛あり。第三、勉強家は益々底識し、不勉強を遠ざくるは、給金（月給二十五円）つゝある義務にそむかざるか。第四、昨日、矢野（竜渓）先生を怒倣なしと罵りたる所以は如何……等なり。

記名は山本修吉とあり。

今朝、富永氏（徳蔵、鶴谷学館生徒）を訪ひ、山本修吉なるものを知らずやと問ひしに知らずと答えぬ。則ち、此の勧告書の事を語りたるに、吾が推測にたがはず、学館生徒の或者の行為ならんと云ふ。

たれならんかと云へば、石丸（哲一、鶴谷学館生徒）か如きならんと言ふ。吾も亦堅く左様に信ず、即ち今夜彼（石丸）を呼び太い不実なる奴。張堅く自分知らずと言ふ。すなはち、吾が思ふ。吾が志す所、信ずる所を、

至に誤解なかりんことこそ望ましけれと語る。彼も亦承知したり。其他大いに道を語る。

このことについて、生徒藤田連次郎の談。

二月頃、益友会（鶴谷学館の演説会、討論会）の席上、独歩が僕にも演説させろというので登壇させた所、矢野竟渓先生の悪口を云ったので、青年が大いに立腹し、激論の末、独歩を追い出すようにして帰した。

その次の会の時にまたやって来て、もう一度演説させろと云ったが、その時は拒絶した。これが大議論になって青年連中、田川、高橋達も居たと思うが、政り合いにはならなかったが、大恩ある先生（矢野竟渓）を何で罵ったかというようなことで、卓を叩いて口角泡を飛ばして議論し合った。

独歩は山高を中折にしたような帽子を持っていたが、それを掴んでは力み、額に青筋を立てては弁じていたが、とうとう登壇出来ずにカンカンに怒って、かぶられないようになった帽子を握ったまま出て行った。

（註）① 竟渓は、嘉永三年佐伯藩士矢野光儀の長男に生まれ、十九才の時に一家と共に上京し、福沢諭吉の慶応義塾に学びました。後、福沢諭吉や伊藤博文の推挙によって官界の重職を歴任し、ないし大隈重信（早稲田大学創設者）の抜擢で駐支公使になりました。

一方では「報知新聞」を主宰し、「近事画報社」（岡本由独歩編集主幹）を起し、大阪毎日新聞副社長となり、ジャーナリストとしても当時を代表する人物でした。

② 来佐四ヶ月後、佐伯出身の矢野竟渓の悪口を言ったため、独歩は鶴谷学館生徒の反感を買い、そして排斥運動を受け、非常な事態を迎えることになりました。この興味ある事件の経過が日記の中にしたためられています。

明治二十四年十一月、長島書房発行の「西遊漫記」（竟渓著）より一部より。

往年余の在郷（出身）の時、秋田の大久保氏旭州（良）漫遊帰りとて先づ余を来訪せしが、氏も亦た風光の佳絶なるを嘆賞せり。一日氏と共に舟を竟渓に浮ぶ。（佐伯湾に注ぐ川、竟渓川を遡ること里余の地、即ち竟渓なり）

此辺は大小の諸山逶迤（いくねり続く）として崩涛の如く高低参差、流れて海辺に走る。平野あり田畝（たはた）あり、銀色の渓流、蜿蜒として其間を走る。亦一種の勝地とす。此地（佐伯）に成長せし頃は左程にも思はざりしが、久しく他郷に在て偶ま帰り見れば実に景光の人目を悦ばしむるを覚ふ。余の号は即ち此の地名に取る。－－－－－－－

余の田園は佐伯湾の中央なる大入島に在り。此島は最も雑に富むを以て有名なり。島の周囲三里、余、陸地を離れ昔時より狐狸の類渡り住むの恐れなきを以て雑の蕃殖する甚だし。

（註）② 佐伯市長瀬の天満社並びに東光庵には、次の説明板が立てられています。

山は静かに、いささむる竹風のかそけく、緑しもたる木々に小鳥しばなく。水は動きて岌巖にかゝり怪石に迸ふ。

天満宮鎮まりまして祭神かりの老梅早春に香る。水はよどみて杜鵑花（さつき）紅にもえ、鯉魚漸く太し。

池に臨みて冬水庵あり。

佐伯藩侯しばしば往駕（来訪）開宴と愛で神話多く残る。小径をロぼれば延命地蔵堂あり。人々つねに霊験功徳を左たう。今は野分（秋はげしく強く荒れる風）のため潰滅しおれど、往時深潭（シンタン＝深いふち）なり神龍すむと伝えらる。

竟渓の名のよって来るところなり。市中心部より十数分にて達し以て俗塵を洗うにたる。まさに佐伯市一番外の仙境といふべし。

昭和三十六年七月　佐伯市商工観光課

また、同境内に次の碑（御影石）もあります。

（正面文字）

龍渓之碑

（台座文字）

水、巖に迸り、湫地（低地）に清し、山四時の趣尽くるなく、渓梅殊に佳し。

菅原神鎮守、冷水庵懐古あり。さはれ竟渓の風光時の流れにあれたり。

今改修す。景勝弾まず。浜田義雄君これが顕彰に提唱年あり、記してその功績を称ふ。

昭和三十六年五月八日

佐伯市長瀬部慈

明治四十年の冬（十二月）に竟渓が北陸に旅行した際、風雪の夜の宿で、故郷佐伯の旧友に思いをめぐらせて作った漢詩を左に掲げます。

発越州、途中感懐口占、遥寄寄郷里之知友諸君

三十九年天一方　故人多在鶴城中

孤燈風雪山館夜　不覺東京夢豊後

（註）① 三十九年は竟渓上京後の三十九年間。

② 竟渓と雑誌その他で行動をともにした佐伯の旧友を指します。

③ 後豊は豊後と同意語です。

② 従名には中根林鼎、今宗元逸、山中盛太郎の三名を連記しています。

漢詩の「東京を夢みず、後豊（豊後国佐伯）を夢む」の中に佐伯懐旧の情こまやかな竟渓の人柄をしのぶことができます。

（参照年表）

年号	西暦	事項
嘉永　三年	一八五〇年	矢野竟渓生まる。
安政　二年	一八五五	佐藤鶴谷生まる。
明治　二年	一八六九	父矢野光義藩儒某等と家族一家東京へ。
〃　一七	一八八四	矢野竟渓「経国美談」出版
〃　二一	一八八八	春庭病歿（六十一才）―竟渓の手伝い。
〃　二三	一八九〇	矢野竟渓「浮城物語」を報知新聞に連載 毛利公鶴谷学館を設け、青年子弟に中等教育を授く。
〃　二七	一八九四	独歩佐伯を去る。
〃　三〇	一八九七	竟渓清国特命全権公使となる。
〃　三二	一八九九	独歩竟渓の紹介で報知新聞入社
〃　三五	一九〇二	竟渓に招かれ、独歩近事画報入社
〃　四〇	一九〇七	竟渓北陸旅行。
〃　四一	一九〇八	山中盛太郎佐伯町長就任 独歩歿す
〃　四五	一九一二	竟渓龍生地石碑建立
昭和　二	一九二七	竟渓死去（七十七才）
〃　三六	一九六一	長覇区天満社内に龍渓之碑、談期板建つ。

あとがき

矢野竟渓誕生地石碑が、佐伯小学校西側入口（城山登山口に近いところ）に建てられています。

―羽柴、清松、加藤会員研究による―

矢野竟渓先生の顕彰碑を佐伯に建立しようとする機運が起りつつあります。

（この項終り）

○ 史跡・岡の谷招魂所　案内標柱　建設成る

河野典一会員の努力で市役所から標柱をもらい、去る九日招魂所入口三叉路の陽に建設する。小ぜりなかの史談会の奉仕。